

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

日本推理作家協会編 最新ミステリー選集3 新開地の事件〈策謀編〉 ￥450

昭和46年9月25日 初版発行

昭和46年10月10日 8版発行

著者 松本清張 他
東京都杉並区高井戸東 1-22-3

発行者 五十嵐勝彌

印刷者 盛照雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 ©日本推理作家協会 1971

(分)0-2-93(製)02199(出)2271 (0)

まえがき

日本推理作家協会
理事長 松本清張

推理小説の題材が、あらゆる分野のものを吸収し得るために、逆に推理小説としての内容がそれらの分野の中に拡散して行ったかのような現象が一時期つづいた。それを見て、推理小説の崩壊とか衰微とかを言う気早な人たちもあった。だが、その現象はそれぞれの作家が多才のためであり、また一方ではマスコミからの要望のためでもあった。推理小説作家としての才能が枯渇しているどころか、ますます健在であることを、私を除いて、この選集が証明していると思う。

だが、右の一時期の状況は推理小説の本道を守るものには歓迎すべきことではなかったのもたしかである。個々の作家の体質はともかくとして、推理小説と普通の小説とのボーダーラインが曖昧になるのはやはり反省を要しよう。私は前に推理小説はどんな書き方をしてもいいと言ったことがあるが、それはもちろん推理小説としての基本的な約束ごとの中でのことである。この約束ごと

とは、たとえば以前からいわれている「××十則」といった古典的な法則（禁制的な拘束）のたぐいが含まれる。これは読者のためである。それを古いといつて不満に思う人があるかもしれないが、推理小説の法則とはもともと古典的なものなのである。その上に現代や未来のさまざまな世界が構築されてこそ生命があると思う。

推理小説は長編で読まなければ承知しない人があるが、それは偏見に近い考えであろう。推理小説は構成の巧妙つまり焦点の設定、伏線の効果的な配備、意図の明確さを、短編で、もっともよく特徴を発揮する。短いだけに緊密なのである。これもこの選集がよく証明しているであろう。

最近、有望な新人群の輩出があるが、こぞって推理小説の本格的な機能を活かそうと試みているのはよろこばしいことである。

『最新ミステリー選集』第3巻
策謀編
目次

本文カット・中本達也なかもとたつや

新開地の事件・松本清張	6	“紅軍派”大使拉致す・大藪春彦	175
新赤髪連盟・鮎川哲也 <small>あかげ</small>	44	三重塔の力学・斎藤栄	197
恋人とその弟・仁木悦子	63	タバコ・ブラウンの夏・邦光史郎	226
手紙・星新一	81	垂直の陥穽・森村誠一 <small>かんせい</small>	248
遊園地夜景・樹下太郎	94	黒い虹・土屋隆夫 <small>にじ</small>	274
まぼろしの凶器・草野唯雄	111	首斬り志願・高木彬光 <small>くびき</small>	295
迷路の空・三好徹	141		

新開地の事件

松本清張



推理小説史を書き改めさせた松本清張は、昭和史の発掘、古代史の探求を進めながら、国際事件や考古学に取材した作品で、独自の世界を築いている。吉川英治賞、菊池寛賞に続いて、小説現代読者賞の受賞は、読者とともに考え、歩いていることを立証している。

1

都会に密集した家屋は、異なった生活集塊の様相と、隣人との孤絶関係で成り立っているという組合わせから犯罪の伏在を容易に想像させる。実際、その猥雑さと秘密な閉鎖性と、複雑な建築様式とは他人の眼の入る一分の隙もないくらいに内部を隠している。

その上、住人のほとんどは流れ者で素性がわからな
い。長い間そこに居住している者でも隣人について本当

の知識をもっていない。表面は互いの機嫌を損ねない柔らかな会話を交しているが、それが当人の性格でないことは相手のほうで知っているし、その話も決して自分のことには深く触れさせない。こういう秘匿的な人間が相互に断絶し、しかも軒を重ねた家屋内に住んでいるから、犯罪発生には適切な条件を備えているように見える。

それにくらべると、田舎は——遠い地方に出かけるまでもなく、東京の近郊を眺めるだけでよい。そこには疎らな家屋をとり囲んだ防風林があるか、山裾の杉林があ

るかである。家屋と家屋とは充分に間隔がとつてあるし、裏口もたいてい戸が開いていて内部をまる見えにさせている。居住者は何代も前からつづいた者ばかりで、互いが家族の一部のように何でも知っている。これでは体裁をつくつても仕方がないから、会話は気どりがなく、自然のままに開放的である。

武蔵野の場合、涯しなく田野がひろがっている中で集落——それも多くて十軒、少ないので二、三軒の家屋と、それを保護する防風林の点在がある。上代の条里制が遺つているところでは、その名残りの畔道を伝つて人が家に達するにはかなりな時間がかかり、豁然とした視野はどこからでもその人物の姿を認めることができる。

こうした開放的な居住地を人が眼にすると、詩的な情感は湧いても犯罪の伏在を想像することはできない。もし、そうした気持ちを起こせば、よほど変わった想念だと自分自身をたしなめるにちがいない。

しかし、ここ十年ばかりで東京の近郊も変わった。勤め人の可愛い家がふえ、私設のアパートが大小となく建ち、公営の白亜の団地が出現した。それにつれて小さな商店街がほうぼうにできた。農家は土地を売った金で、古い茸のようなワラぶきの家を、総檜造りの広大な建築

にかえた。

だが、それでも、まだ田園がすっかり住宅地に侵略されたわけではない。水田も畑も相当部分残っていて、米、麦、野菜が昔どおり栽培されている。雑木林も全部が切り倒されたのではなく、あちこちに森を残している。その下には相変わらず湧き水があり、小川がまだ流れている。

こうした新しい環境を、前にみた犯罪的な予感からすると、どのような範疇に入れたらよいだろうか。都会住宅と田園の折衷という立地条件と環境の新現象に、犯罪分類学者はしばらく当惑する。秘密性と開放性の同居は、家屋にしても人間にしても、境界が判然としなくなる。田園が現代化している際だから、よけいに厄介である。

結局、都会の秘匿的な性格が田舎の開放性を侵略するか、田舎の非秘密性が都会の住宅慣習に影響を与えるかによって、犯罪分類学者の頭脳の判断を截然とさせる方向にもってゆくようである。

そこは行政区画では東京都下北多摩郡になっていた。N新田の名の示す通り、以前は開墾地だったのだが、丘

陵地をはるかに見るこの平地も、農地が次第に少なくなり、半分以上が団地や住宅で占められてきた。電車で新宿まで約一時間という便利さもあって、ベッドタウンとか田園都市とかいう美称を冠せられて、住宅の繁殖はますますひろがるうとしている。もちろん、土地の値も異常な高騰となった。

耕作を放棄した農家は、土地を売った値で都会風の家を新築した。いま、サラリーマンの小住宅の間に見かける大きな門構えの立派な家の多くがそれである。なかには、ちょっとした料亭かと思ひ違いするような和風の家もあり、和洋折衷の邸宅もあった。仕上がりはどことなく垢抜けのしないところがあつたが。

そうしたなかで、こぢんまりと改築した質素な旧地主も何軒かはあつた。やはり周囲に防風林を残し、前には柵を干すだけの広い空地をとっている。その構えでも知られるように、そうした家はまだ「農家」だったのだ。

ほうぼうに持った農地をいっぺんに売ることなく、地価の値上がりを見越して、徐々に分譲しているのだった。おかげで、すでに住宅地となっている区域にはいつまでも農耕地が間にはさまっているの、いっこうに街らしくならないで発展を阻害されていた。住民たちは、「百

姓」の貪欲を非難した。

そうした種類の農家の面影を残す家の一つに「長野忠夫」の標札があつた。標札のかかっている大谷石の門柱の左右にはコンクリートの万年塀が伸びて約百二十坪の敷地を囲んでいる。その家は、二十五坪の平屋は中央よりずっと背後の北側に引っ込んでいて、前は空地とも庭ともつかないものになつていた。庭らしい様子を整えているのは、格子戸の玄関正面をかくしている前栽の植込みで、松が五本、椿が三本、それに下植えとして満天星数本が素朴に繁つていた。前栽を火山岩の石が円形に囲んでいるが、石は黒く、青苔がついていた。

そのほかは、だだっぴろい地面で、何の人工も加えられていなかった。が、どういふものか石がやたらと転がっていた。この家が改築されたとき、庭師が入つて材料の秩父の石を運び入れたのだが、値段の折合いがつかないため造園は放棄され、結局、依頼主が石の値だけ払つてそのままになってしまった、といういきさつを人に容易に想像させた。石は何の観賞の価値もない、くだらないものである。間の空地には雑草やゼンゴケが生えている。

二十五坪の母屋のうしろにはトタン屋根の細長い古い

納屋が付属していた。これこそ改築前の母屋と同じ時代のもので、つまり、この家が純粹に農家だったころの蔵であり、麦、野菜、農器具の格納庫だったのだ。今は、屋根のトタンも腐り、板壁も朽ちている。

唯一の風情は、その納屋のうしろと、敷地の東西の隅にかたまっている雑木林だった。松や杉の針葉樹はあまりなく、樺、楓、樅などが多い。見事なのは樺で、そのなかでも三本はとび抜けて高く、空に向かって亭々とそびえていた。この家の何代か前の住人のところに自然林の一面を屋敷内にとり入れたものが、その一部を残しているのだった。

この家の近所は旧いので七、八年前、新しいのは去年か今年建った家ばかりで、勤め人か、退職した人の近代的な匂いのする小住宅ばかりであった。

家の前の道は勤め人が駅に行く途中でもあり、また駅前の小さなマーケットに主婦たちが買物に行く通りでもあったから、朝と夕方とはわりに人の通行があった。

「長野忠夫、か」

門の前を通りかかった若い勤め人が歩きながら標札を見上げていった。

「土地を売って儲けたお百姓さんだろうな。先祖代々の

土地というけれど、法外な値で売れたのだから、まる儲けみたいなものだ。会社や親類から借金でやっとマッチ箱のような家を建てたわれわれからみるとうらやましい限りだな」

「でも、農地を売ってしまったあとは、どうして生活していらっしゃるんでしょう？」

駅まで夫を見送る若い妻は、いっしょに標札に眼を走らせて夫と肩をならべて歩いた。

「ごっそり銀行に預金して、その利子で食べているんだろう。農家の人の生活は質素だからね」

夫は道に捨てたハイライトの吸殻を靴の先で踏みつけた。

「それでもないよ」

と別な二人連れのサラリーマンがこの家の前を通りかかって同じような問答をした。

「近ごろの農家の人は利口だからね。銀行預金だけじゃ満足しない。土地の値上がりを待って申し訳程度に野菜をつくっている。現金収入のほうはさ、前に売った土地の金を資本にして、駅前でパチンコ屋とか、風呂屋とか、八百屋とか小さなスーパーストアとかいった日銭かせぎをしている。ちゃっかりしたものさ」

「しかし、人にだまされて土地を売った金をすった連中も多いらしいな」

「百姓は目さきの欲に迷わされるからな。ま、そういう手合の話でも聞かないことには、われわれの憂鬱は晴れないよ」

二人の笑い声は朝の澄明な空気の中にすがすがしくひびいた。

家を建てるため土地を探しに来た中年夫婦が駅前の不動産屋に連れられて通りかかった。

「長野忠夫……」

中年の夫は門標を声出して読み、そこから家の全体を眺めた。

「この家も前からつづいた農家だったんだろうね？」

「なんでも三代つづいていいるというんですがね。あたしはこの辺は新しくよく知らないんですが、ふるくからいる土地の人の話だとそういっていますね」

肥った不動産屋はこの辺の地図を片手にしていった。

「けど、この長野忠夫さんというのは中央線のM駅近くで洋菓子店を持っていて繁昌はんじやうしているらしいですな。とてもうまい菓子だというので、この近所でも評判です」

「この近所でも？」

「忠夫さんが近くの奥さんがたに頼まれて、店から注文品をよく持って帰るらしいのです。勤め人の奥さんはそういうものには口が肥えていますからな。忠夫さんも菓子子の職人です」

「お百姓の息子が洋菓子屋さんとはちょっと変わっているね」

「いや、養子だそうですよ。この家にはひとり娘しかいませんでしてね。いまは、農地も半分以上売り払って、菓子屋の資本にしてしまってるそうです。……父親のほうは亡くなって、いまは母親だけです。あたしも商売柄、ときどき、そのお袋さんのほうには会ってますがね。まだ五十の半ばで気持ちのいいひとですよ」

不動産屋のおしゃべりがつづくので、妻は夫を促すように先に歩いた。

地味なネクタイをつけた中年の夫は、もう一度その家を振りかえって高い樺のある雑木林を塙越しに眺めた。

2

この家の主、長野忠夫の養父は直治といった。忠夫の旧姓は下田である。

長野家は三代つづいた農家で、初代は明治の中期にここに居ついた。もっともそのころは小作人だった。先代が昭和十年ごろによく半町歩足らずの田を買いとって、半自作農となった。当時はそれこそ渺茫たる武蔵野の田野で百姓家の点在がただけだった。

伴の直治は二十七のとき、見合いで六歳下のヒサといっしょになった。ヒサは近隣の山村の生まれで働き者だった。彼女はそこから固肥りの女であった。自作農と小作農とを合わせた田地も草も生やさずにやってゆけたのはヒサの努力である。酒好きな直治は女房のあとからしぶしぶ野良に出てゆくような男だった。

そのかわり、直治には商売の才能があつて、昭和十七、八年の米の統制時代にヤミをやつて儲けた。他人の米まで買って売ったのである。そのため、二度ほど警察署の留置場に入れられた。儲けた金でまた田を買った。

戦後の農地改革のときでも直治はうまく立ち回った。小作農の土地はむろん自分の手に帰したが、そのほか情勢にイヤ気がさしている地主の土地も少しずつ手に入れた。

「そんなに田を買って、どうする気かねえ。あんたは働かんし、お婆さんは役に立たんし、赤ン坊負うたわしひ

とりじゃ手に負えんたで」

ヒサは口を尖らせた。

先代は死亡し、老母が残っていた。彼には兄弟がなかった。

「心配しねえでもいい」直治は笑った。「いまにおめえも鋤を持たねえでもいいようになる」

直治は常に田圃でヒサに文句を言われているので、いつのまにか女房が苦手になっていた。

「そいじゃ、また小作農が頼める時世になるのかえ？」新しい法律で自作農しか認められないことを知っているヒサは眼を輝かした。今度は小作農を備える身分になるのである。

「そうなるかもしれねえ。まあ、長い目で見とけよ」

直治は相変わらずの米のヤミ売りをして金を儲け、儲かったからといっては酒を呑んだ。まるでヤミ売りすること、野良働きの義務から脱れようとしているようであった。

だが、そんなことで、ヒサは直治を許さず、彼を田畑に引き立てた。金儲けはいいが、亭主が酒ばかり呑んで、酔って寝るのが気に入らなかつた。夜、ヒサのほうで足を出して触っても直治は朝まで熟睡し、肩に手をか

けると無意識に向こうをむいて躰をかいた。

固肥りのヒサの身体は百姓仕事でますます健康となっていた。ヒサが生まれた近県の山村は最近まで若い者の悪風習が残っていて、彼女も直治といっしょになる以前に女にさせられていた。直治は決して強靱なほうではなかったが、酔っていない限りは女房にそれほど不満は与えなかった。

直治の予言は少し違ったけれど、ヒサがそんなに百姓仕事をしないで済む時代がきた。終戦から十年近く経つと、この辺も都会の住宅の波が押し寄せてくるようになった。新宿から中央線沿いに西に、順々と、しかも急速にひろがって、みるみるうちに田や畑が住宅地となった。そうして家と家との間に残された農地は忽ちあとからの家で埋めつくされ、商店街ができ、団地が建てられると、さらに発展した。暗かった夜は灯の輝きを増した。もっとも、そうした急速な発展もK駅から三つか四つ目の駅までで、それから西のほうはわりあいとそれが緩慢であった。都心へ出るのに時間がかかりすぎるからである。しかし、徐々にだが新しい家がふえてゆくことはだれの眼にも確実に映った。土地を求める人々の欲望が次第に西に伸びてきたのである。N新田の農家が先祖か

らの農耕地を売った金で、憧れの都会風な家をぼつぼつ新築しはじめたのはそのころである。

直治が大きな損をしたのは、ひとり娘の富子が十歳の時であった。彼は農地の三分の一を住宅地を望む人のために売って、しこたま現金を握ったが、なまじ商売気のあるところから不良株をつかまされ、欲に目がくらんで無尽講まがいのインチキ会社に大量投資し、その上、あろうことか素人には最も危険な小豆相場にまで手を出して、大きな穴をあけてしまった。

直治がヒサの前に威信を大きく失墜したのはいうまでもない。ヒサは怒り、泣き、亭主を罵ったが、それで損害が一銭でもとりかえせるものでもなかった。直治は恐縮したが、考えてみると、投資ができるくらいは財産をつくったのは彼自身の力である。野良で鉄だけを揮っていたヒサの働きは貧農仕事で、財産づくりには一片の寄与もしていない。金を儲けた人間が不慮の損失をしても咎められないことだが、普通の夫婦ではそんな理屈は通らない。それにヒサにとって堪えられなかったのは、直治の小豆相場の穴埋めに、残っている農地をかなり多く売却しなければならなかった。こうして、当初直治が抱えていた土地は、逆に三分の一となった。

「これから先、どうなることやら心配でならねえで、いまのうちに家を建てよ」

ヒサの発案というよりも独断で、古い百姓家がこわされ、町風の新築がなされた。が、残った土地、つまり財産が心細く感じられたため、その新築は付近の同じ農家のそれとくらべて小さくまことに中途半端なものとなった。はじめ庭をつくるつもりで庭師に石を運ばせたが、庭師が見積もり以上の工事費になるといったので喧嘩をし、運び入れた石をほったらかしにしてしまった。家のうしろにある古い納屋もまだ百姓をつづけるつもりで残したのだし、塀の中の雑木林も体裁に刈る予定だったので、出資を惜しんでそのままにしてしまったのである。それが都心からくる人の眼に俳諧的な風情を感じさせている。

このとき、直治は五十六歳、ヒサは五十歳、富子は十三歳であった。おそく生まれた子である。老母は前年死んだ。

その翌年の秋、長野家は一人の青年を間借り人に置いた。

新宿からK市にいたる中央線の途中にO駅がある。この辺一带は会社の役員とか貴族の後裔とか大学教授とか

著述家とかが多く住んでいて「文化区」として知られているのだが、そのO駅の近くに「銀丁堂」という洋菓子店があった。フランス風の、なかなか甘味い生菓子をつくるので「文化住人」を顧客として繁昌していた。その支店二つ以外、他の店には決して菓子を卸さないから、この辺の婦人たちには「銀丁堂」の特徴ある包紙をもつことがひとつの見栄にすらなっている。――

その「銀丁堂」の主人の遠縁にあたるものがN新田に住んでいて、間借り人の話を直治夫婦のところを持って行ったのだった。「本人は九州のF市の菓子職人ですが、銀丁堂の主人のところは何度も手紙を寄越して、ぜひ技術をおぼえたいから見習いで採用してほしいと熱心に頼んだのです。もちろん給金も見習いなみでいいからということですね」

その人は夫婦に話した。

「当人は二十六で、地方では立派な菓子職人です。いい給料もとっている。それが見習いなみの安い手当てでいいというんだから向上心があるんですね。で、とにかく、こっちに呼んでみて素質をみようというわけで銀丁堂の主人が上京させたのです。で、腕を試してみると田舎臭いけれど見込みはある。愛想も何もない人間だが正

直なんですな。で、小僧なみの給料で傭^{やと}ったが、困ったことに雇人の寝起きする場所がいっぱいでしてね。まあ、無理に割りこませることもできないではないが、なにしろ同じ年ごろの人間が職人で自分が見習いじゃ、当人が可哀相だという主人の心づかいで、適当な間借り先を見つけてやろうということになりました」

だが、店の近くでは部屋代が高いので少ない給料の当人に気の毒である。というところから、こちらにその人間を置いてもらえないだろうか、ここからだとも駅まで電車で三十分くらいだからまことに好都合だがという話だった。

間借り人を置く——初めてのことで直治夫婦は互いに顔を見合わせた。

「わしのとこは、この通り寂しい田舎だが、本人が辛抱しなざるかえ？」

ヒサが訊いた。

「そりゃ辛抱しますとも。当人も生まれは九州の山の中だそうで、田舎のほうが落ちつくといつてこの話に乗り気なんですよ。そうそう、本人は安い給料だけど、実家は中農で毎月の仕送りはあるんですよ。三男坊ですがね、東京の菓子職人として一人前になるまでは跡取りの

長男が送金するといつてますから、部屋代についてはご迷惑はかけません。万一のときは銀丁堂が責任を負いますから」

直治は、そんなら構わねえじゃねえか、と呟^{つぶや}くように言った。

「けど、うちには女の子がひとり居るんでね、若い男のひとを置くのはどうだろうね」

とヒサは難色を示した。

「娘さんはいくつですか？」

「十四ですよ。いま、中学生だけど」

紹介者は笑い出した。

「そんならご心配はいりません。本人はもう二十六ですからね。それに職人として一人前になるまでですから、二、三年の間だけ置かせてもらえばいいわけです」

ヒサは、よく考えてみるから、明日もう一度来て欲しいと言った。

3

下田忠夫は不格好な顔だった。顴^{ほおほね}骨がつき出て、顎^{あご}が長い。鼻が肥えて、唇は人一倍厚かった。いかにも九州

人の先祖が南方系であることを証明しているようであった。太い眉は両の間がせばまっていて、濃い毛が色の黒い額にうすぎたなく生え、眼も大きかった。ただ、笑うときに出る眼尻の皺と鼻の皺に愛嬌が出た。

背が高く、身体は頑丈そうだが、動作は落ちついていて無口であった。その太い指が見せるように、全体がゴツゴツした感じで、およそ女の魅力の対象からは遠かった。

十四歳のひとり娘のことを考慮したヒサの懸念は消えた。

忠夫は、この家の表側の六畳をあてがわれた。玄関から入ってすぐの突き当たりになるのは、彼が朝の五時ごろには起きて電車で「銀丁堂」に行くからである。それと、西側の奥になる八畳の夫婦の部屋の横が富子の寝室になつていたので、彼を娘から隔離する意味もあった。

「わりと、おとなしい男じゃねえか」

と、忠夫を家に置いて一週間ばかり経ったころ直治が酒を呑みながらいった。

「そうだね、間借り人としては邪魔にならないね」ヒサはいった。「それにしても、醜男だね。様子も垢抜けがないし、あんまりものもいわないよ」

「うむ。ああいう男が間違いがねえ。おれが酒はどうだなといったら、呑めねえ性質だといいやがった」

「おまえさんのつき合いじゃ困るから、ちょうどいいよ」

「とっつきはよくねえな。これから先はどうか知れねえが、いまのところは田舎出のままだ。こっちも田舎者だが、九州の人間とはやっぱり違うからな」

「若い者だし、そのうち東京の風に染まるよ」

「おれはそうは思わねえ、あの男はこのままだろう。二十六にもなった菓子職人が見習い志望でやってきたんだから、根性はしっかりしている。あいつは三年も経ったらしい腕になるぜ」

ヒサはそれに疑い深い眼をした。ごつごつした忠夫と、繊細で優雅な洋菓子づくりとが観念のなかでどうしても一致しないようであった。

「それはそうと、富子のほうはどうだえ？」

直治はひとりで酒をつぎながらきいた。

「どうというと？」

「富子は下田をどう思ってるかな」

「どうも思やしないよ」とヒサは、桃色の齒齶を出して笑った。「あの子はまだ十四じゃないか。子供だよ」